

野呂川 荒川出合 3 ルンゼ

## 「夢のブライダルベール」

2012年2月11日～12日

メンバー：斉藤（記）、岡崎（M&C）西本（無所属）

去年、荒川出合 3 ルンゼの「右のナメ滝」を登った時に初めて、その左側に堂々と聳える「夢のブライダルベール」を目にした。勿論、アイスクライマーにとって憧れの氷瀑である、その存在は以前より知ってはいたが、あまりの威圧感に登攀の対象として見る事は出来なかった。今年は自分なりにアイスクライミングに力を入れてきたが果たしてその成果は…

2/11 昼間の内に南アルプス林道へと車を走らせ、奈良田第一発電所近くの林道ゲート前の駐車場に車を停める。荒川出合までは積雪の無いアスファルトの林道の為、スニーカーで歩きだす。今回はザックをキャリーカート

に縛りつけ引っ張って行く事にした。なかなかお勧めです。野呂川の荒川出合であるの野呂川発電所近くの河原にテントを張る。早々に酒を飲み始め、翌日の本番に備え早めの就寝に就く。

2/12 AM2:00 に起床し、食事を済ませ出発の準備をする。今回はシャワークライミング敗退を嫌いまだ、気温の低い夜明け前に核心部である 2P 目の取り付きまで登ってしまおうという作戦だ。星の瞬く下、3 ルンゼへと向かう林道を歩きだす。3 ルンゼ出合でアイゼンを装着し、沢沿いをジグザグに登りだす。1 週間前には 3 ルンゼ下部の沢を埋め尽くしていたという雪も、数日前の大雨によりすっかり洗い流されて無くなり、代わりに水流が顔を覗かせている。ブライダルベールにも水が流れているのではないか、まさか、既に崩壊なんて事も、と悪い想像が頭をよぎる。まもなく現れるナメ滝をふくらはぎをパンプさ

せながら越えると目の前に立ちはだかる「夢のブライダルベール」を確認する事が出来る。暗闇にボンヤリと浮かびあがるその姿は巨大な幽霊のようで実に不気味だ。取り付きで登攀準備を整え、AM4:50 岡崎さんのリードにより確実な登攀が開始される。ヘッドの灯りにより時折 2P 目の氷柱部分が浮かびあがるが、はっきりした形までは確認する事が出来ない。岡崎さんからのコールにより私も登り始める。ウェディングドレスのスカートの裾のような1P目はやや右よりから取り付き、2P 目の垂直部分の袂を左に大きくトラバースし、ツララの軒下に出来たテラスでピッチを切る。グレードはIV+。一見、傾斜が寝ているように見えたが、取り付いてみると楽では無く、朝一番で登るにはやや緊張する。トラバース部分にはいと、その一帯は氷柱部分からの雫で出来たのであろう氷筍の群生地となっている。アックスの引っ掛けでおっかなびっくりトラバースし、テラスに辿り着く。

その後、西本さんがテラスに着くとようやく夜が明ける。明るくなくても気温は上がらず氷柱部分に流れる水は一切無い。いよいよこれから核心部である 2P 目に岡崎さんのリードで取り掛かる。



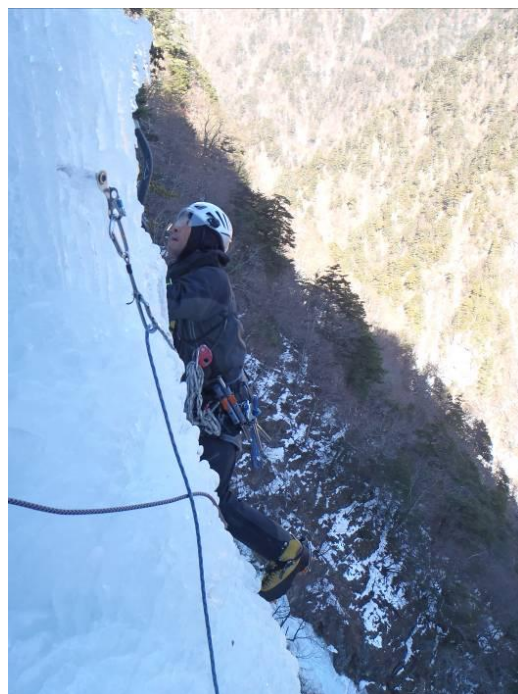
核心 2P 目のスタート

テラスから何度か登っては戻り、ルートを探る。叩けば根こそぎ壊れる氷はスクリュウをきめてもすぐに裏に突き抜けてしまい、なかなか踏み込めない。あまりの悪さに敗退の二文字が頭を過ぎる。最後にテラスから右に水

平トラバースして直上出来そうなルートを探る。ビレイしながら外に体を乗り出し岡崎さんの様子を伺うが、セルフビレイをツララに巻いたスリングから取っている為、怖くて体重をかけられない。僅かに見える岡崎さんの体がトラバースから直上に移る。突破口は開かれたようだ。ビレイしている手からロープがジリジリと伸びていく。かなりデリケートなクライミングである事がロープを通じて想像できる。壊れた氷が落下していく音だけが谷に響く。手元から 20m 程ロープが出たあたりから、ロープの伸びるスピードが上がる。

垂直の氷柱部分をクリアしたようだ。暫くした後、ビレイ解除のコールが掛かる。続いて私が登り始める。今までに経験した事の無いVI級というグレードと悪い氷に苦戦する。完全な 90 度の傾斜でアッという間にパンプする。アックステンションを掛けながらゆっくりとしたペースで高度を稼ぐ。垂直部分が終わると少しは楽になる。ヘトヘトになりなが

ら、ようやくビレイ点である左端のテラスに辿り着く。西本さんの到着を待ち、最終ピッチである 3P 目のスタートだ。



### 3P 目のリードをスタートする斉藤

ここは私がリードさせて貰う。2P 目のスタートと同様に右にトラバース後に直上となる。テラスから乗り出すと足元に 100m の空間が広がる。気持ちを落ち着かせようと心掛けるが、恐怖心に勝てず、すぐにスクリューを打てそうな場所を探してしまう。スクリューを打ってもすぐに裏に突き抜けてしまい、2回、

3 回と場所を変えてねじ込み、何とかマシな所にスクリューをきめると、再び右へとトラバースする。直上出来そうなラインを見つけると、スクリューを1本きめた後、上へと進路をとる。2P目に比べると若干、傾斜は落ちるものの依然として氷質は悪い。フォールしたら恐らくスクリューは抜けるだろうと思うと、どうしても動きが固くなる。恐怖心を押して殺して一手一手のムーブに没頭する。終了点までの距離とスクリューの残量を天秤に掛けながらジリジリと高度を勝ち取っていく。ピッチの半分も登った頃、スクリューの残量を確認すると、このままでは明らかに弾切れになる事に気付く。覚悟を決め、プロテクションの間隔を空けていく。腕の力も限界に近づいてきている。緊張のあまり喉はくつつきそうな位、渴いている。見渡すと右の岩とのコンタクトラインに丈夫そうな木が生えている事に気付く。その木からプロテクションを取れば終了点まで何とか届きそうだ。右上し

てアックスを木に引っ掛けぶらさがり、スリングを掛けクリップする。その瞬間によく終了点まで行ける事を確信できた。残った3本のスクリューの内1本を少し登った乗り越しに、1本を滝の落ち口にそれぞれきめ、急傾斜部分をクリアする。あとは簡単なナメを数m 確実につめるだけ。左にある太い木を終了点にと決め、左へとトラバースするが、雪の被ったスラブを横切るのがいやらしい。下に目を戻すと最後にとったプロテクションから既に7~8mのランナウト。もしここで足を滑らせたなら150mの空間へと投げ出される。最後にミスっては元も子も無いので、再び氷の部分まで戻り、ラスト1本のスクリューをきめた後、慎重に終了点に向かう。終了点でセルフビレイを取り大きな溜息をつく。3P目のグレードはVI位だろうか。終了点に3人が集合するとPM12:40。既に登攀開始から7時間50分の時間が経過していた。すぐに下降の準備に取り掛かり、右岸のリッジを

4P、2時間の懸垂下降で約10時間ぶりに地べたに降り立つ。深夜の内から行動したにも関わらず、車止めに戻った時にはすっかり日が暮れていた。

「夢のブライダルベール」の登攀を終え、まず、この機会を与えてくれた二人のパートナーに感謝したい。お蔭で「自信」という大きな収穫を得る事が出来た。

「夢のブライダルベール」にはまだ、2P目をリードするという楽しみが残されている。次回の、その登攀で更に大きな収穫を得る事が出来るようこれからもトレーニングに励みたいと思う。

1P IV+ 50m 岡崎

2P VI 50m 岡崎

3P VI- 50m 斉藤



充実の登攀を終え